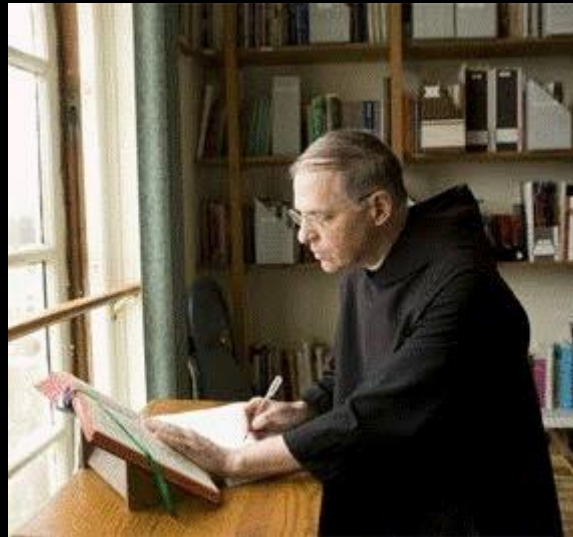


## サンフランシスコの新しい典礼研究所

(ローシアン・T・サリバン)

それはわくわくするような知らせ。サンフランシスコの海岸地域に住むカトリック信者で、よく訓練を受けた司祭をどんなことがあっても望んでいた人々は簡単にそれを失うことだってできたのです。サンフランシスコ大司教としての最初の1年のサルバトーレ・コルディレオーネ大司教の事績に関する記事を見ると、これは勇気を与えてくれる知らせでした。つまり、著名なグレゴリオ聖歌の専門家で聖歌の作曲家である、サミュエル・ウェバー神父（ベネディクト会）がメンローパークの聖パトリック神学校・大学に典礼研究所を立ち上げることを助けるために採用されたというものでした。

ウェバー神父はレイモンド・バーク枢機卿の指示で 2008 年に創立したセントルイスの宗教音楽研究所の創設者で所長でした。インターネットの「聖歌カフェ」のジェフリー・タッカーによれば、「ウェバー神父は実際、英語圏において、偉大で才能のあるカトリック音楽の学者、作曲家、聖歌の実践者たちの一人である」と。



ウェバー神父

### 将来どんなことがおこるだろうか？

新しい典礼研究所の目的について詳細は現時点では分かりませんが、そう遠くないでしょう。コルディレオーネ大司教は1月1日の後、この研究所についてインタビューを受けました。セントルイス宗教音楽研究所で提供されている以下の内容が、サンフランシスコの神学校が提供しようというものをよく示してくれるでしょう。

- ・小教区の音楽家、大司教区の団体、関心ある個人向けの宗教音楽、特にグレゴリオ聖歌に関する教育プログラム
- ・小教区での英語のミサ歌唱、例えば、入祭唱、答唱詩編、聖体拝領唱、の支援
- ・『教会の祈り』の歌唱の支援
- ・グレゴリオ聖歌歌唱のための聖歌隊育成を希望する小教区の支援
- ・大司教区でのローマミサ典書の英語版の完全な導入のためのプログラム



聖ペテロ司祭兄弟会の司祭とサルバトーレ・コルディレオーネ大司教閣下

2013年11月15日にサンディエゴ・デ・アルカラでの宣教25年を記念して荘厳司教ミサが行われた。サンフランシスコの伝統的ラテンミサ・ソサエティの会員たちはサンディエゴに飛び、この特別なミサに参列した。

「典礼の祈りの唱え方、歌い方のワークショップもあるでしょう」とレイムンド・レイエス神父（サンフランシスコの日没の聖アンナ教会司祭）は予想します。「祈りと崇拝の文化を創る典礼は大司教にとって重要であるのだと私は思います。おそらく大司教は祈りの文化を創る努力を通じて、大司教区の信者の生活における他のあらゆるものの構造を変えることができているのでしょう。」

**2009年 全く守られていない状態**

「スンモールム・ポンティフィクム」公布から2年以上たった2009年11月にブロガーのジョン・ズールスドルフ神父が神学生たちに自身の神学校における伝統的ラテンミサとラテン語の訓練があるのか、それらに与りやすいかといったことを報告するように頼んだことがありました。

ズールスドルフ神父はサンフランシスコの神学校では（同教令が）全く守られていないという報告を明らかにしました。「カリフォルニア州のメンローパークの聖パトリック神学校・大学の神学生です。この学校は聖スルピス会が運営しています。現在、特別形式のミサもラテン語の通常形式のミサのどちらも訓練は提供されていません。ラテン語はもはやコースとして提供されていない（昨年までは選択コースとして常にありましたが）。昨年、学生部長（現在は院長）は私の神学生の友人の一人に特別形式のミサの訓練のためのコースを導入する計画はないと告げました。」



2013年10月2日、守護天使の祝日、サンフランシスコの海の星教会の司祭マーク・マッザ神父は叙階33年記念ミサを祝った。サンフランシスコ大司教サルバトーレ・コルディレオーネ閣下が臨席した荘厳ミサ。

対照にセントルイス大司教区の神学生はもっといいニュースを伝えています。特別形式のミサ、通常形式のミサが院長と神学校で教えている4人の司祭によって定期的に祝われており、歌とラテン語の訓練が提供されています。ラテン語の賛歌と聖歌は英語ミサでも歌われています。「望むものには誰にでも、ミサ、晩課、秘跡を特別形式で執り行うための訓練や捧げ方を学ぶ訓練が受けられます。どの学期でもラテン語は教えられています。（略）通常形式と特別形式の両方のラテン語のテキストの解説と実践がコースの一部としてあります。（略）グレゴリオ聖歌のコースは選択制で、通常1年に1回提供されています。グレゴリオ聖歌、ラテン典礼、典礼や教父のラテン語の研究が大切

にされていますが、それはレイモンド・バーク枢機卿が設立した教会音楽研究所の重要な責任の一つです。」

### なぜ典礼中心に？

サンフランシスコを「湾岸のソドムとゴモラ」と皮肉に呼ぶ多くの人々にとっては、典礼の変化はコルディレオーネ大司教が直面している諸課題で一番軽いものに見えるでしょう。

しかし、大司教と親しい人々は多くの切迫した問題があるにもかかわらず、大司教が典礼に集中している理由を語ります。大司教をよく知る人々によれば、コルディレオーネは祈りの人で、祈りと個人の聖性が司祭と信徒に重要であることを理解しているだけでなく、「霊的育成の主たる源はミサであること」も理解しているとのこと。

カトリックの典礼の両形式における改善のために教皇ベネディクト16世が「スモールム・ポンティフィクム」によってとった処置がいまや彼が引退したので停止されるのではと恐れている人もいます。典礼の改善がバーク枢機卿やコルディレオーネ大司教を含む多くの主要な教会指導者にとってまだ優先事項であること、彼らの献身に衰えが見えないことをみると大いに励まされます。



(Web サイト「レジーナ」に 2013 年 12 月 11 日掲載の記事” New Liturgical Institute in San Francisco” by Roseanne T. Sullivan を翻訳。「レジーナ」編集部許諾済。元記事は <http://reginamag.com/new-liturgical-institute-works-san-francisco/>)